

「千里山」の地名について

——千里丘陵は秦氏による開発か——
十五回生 伊藤（山崎）發子
（福岡在住）

千里山住宅が開発されセリヤマと名付けられる遙か昔、古墳・奈良時代にさかのぼり千里（チサト又はセリ）の名が付けられた理由と周辺一帯を開発し産業を興した「秦氏」を探る大ロマン、日本古代史を縦横に駆使した力作です。

千里山セリという私たちにとって懐かしい地名は、千里ニュータウン（全国のニュータウンの走り）出現や万博開催のおかげで、今や全国にその名が知られている。その場合「セリ」と読むようである。千里山田園都市計画はイギリスのレッチワースを手本にして作られ、大正九年から実施されてきた。関東大震災（大11）で罹災した人達が好んで関西に移り住んだことが初めと云われる（谷崎潤一郎など）。当時、全国で珍しかった庶民の家の一戸建てで、水道、電気、ガスの普及、阪急電車による交通アクセスにより、大阪市内、その近郊に便利につながり、視野が広くなる。梅田へ出れば、京都、奈良、神戸へは簡単に往けるし、少し足を伸ばせばびわ湖、熊野古道、天の橋立まで日帰りもできます。

千里山住宅の成立と歴史については、「会誌5号」10

べり、土俗千里山と称し、九十九（つくも）谷あり」と記され、山の姿がなだらかなところから寝山（ねやま）とされていることもあるようです。

その後数十年を経てまとめられた「摂津志」（1716年（1734年）という書物では、豊島郡の条に「千里山は郡の中央に在りて島下郡に連亘す。一名、根山、島熊山、待兼山、玉坂山、以上三山皆千里山脈」と記述。さらに、「摂津名所図絵」（1798年）では、「広大なるを以て千里山と称す。またの名寝山という。熊野田村の上方にして島下、豊島の二郡に続いて山脈三里に及べり、九十九谷あり」とされています。

また1886年（明治19年）出版の大阪府学務課編による「大阪府管内地志略」の豊島郡の部にも、「千里山は郡の西南から斜に中央に赴く、其脈は西北に走るものを玉坂山、待兼（ましかね）山と言ひ、南に連なるものを榎坂山、垂水山と言ふ」と書かれています。

文献に出てくる「千里」の謂われは以上の通りで、丘陵の広大さを「千里」という言葉で表したとの結論しか導くことが出来ません。

では何故、広大さを表す言葉が「千里」だったのか。別の角度からの推論を紹介しておきます。

先年亡くなられた吹田の郷土史家で、池田半兵衛さんという方の説です。

池田さんの説は、「千里」といふ言葉の発信元は「第五十二代嵯峨天皇（786年～842年、在位809年～823年）ではないか」というものです。嵯峨天皇は

号「連載の和田昌允氏執筆「千里山開発物語（前・後編）」・千里第二小学校O会会誌「ちさと」創刊号（平成25年7月）に、「千里山」地名の由来についての考察は「千里山70年のあゆみ」（平成2年11月）、「会誌2号」（平成11年3月）に詳しい。以下「会誌2号」に掲載の全文を転載する。

（千里（せり）の地名の謂われについて 編集部）

現在、千里ニュータウンで有名になった千里（せり）ですが、その元になったのは千里山、及び旧千里村という地名です。ただし、読み方につきましては、本来、「ちさとやま、ちさとむら」と呼称していたようです。

その千里村ですが、1889年（明治22年）の町村制実施に伴い、佐井寺村と片山村とが合併して一村をつくり新村名となったもので、旧村名の佐井寺と片山はその大字となりました。千里村の村名は、もちろん千里山に由来したものです。

ところで、その千里山ですが、現在の狭い範囲の地域名ではなく、豊中市内から連なる広大な丘陵全体を指していたようです。具体的には、旧桜井谷村大字内田の北方に隆起し、同村大字柴原、同大字南刀根山、同北刀根山、旧豊島（てしま）村大字玉坂から旧熊野田村の西南を回り、旧新田村大字上新田に連なる丘陵です。

この千里山（千里）という地名が、はじめて現れる文献は元禄時代（1688年～1703年）の「摂陽群談」とのことです。「豊島、島下の二郡に続いて行程三里に及

日本三筆の一人で、漢詩を伝教大師・最澄に學び、宮廷文化の主宰者として有名なほか、重陽の節句や花宴の節句開き、作法や衣服を唐風に改めるなど唐の國や文化に親しんでいたとされています。また、母親が百済王氏の一族ということもあり、枚方の百済王氏の邸を離宮と定めて頻繁に訪ねています。一方で大の狩り好きとかで、千里丘陵にもよく馬を走らせたといわれています。天皇が千里にやってくる訪れるのは佐井寺。この地に二回にわたり綿を寄進するなど結び付きが強かったようです。

その嵯峨天皇と「千里」といふ言葉の結び付きとなると、天皇が淀川で舟遊びをした際の「河陽十詠」の中に「一道の長江千里に通じ、漫々たる流水行船を漂わす。

風帆遠く虚無の裏に没し、疑うらくは是れ仙查（いかだ）天に上らんと欲するか」といふ詩があるようです。淀川を長江（揚子江）にたとえた詩ですが、「千里」といふ言葉が出てきます。天皇が千里といふ言葉を知ったのは、漢詩の師・最澄の影響といわれています。千里を照らして一隅を守る「照千里一隅」は漢の司馬遷の句ですが、唐に留学した最澄も「山家學生式」に「照千一隅是則国宝」と記しています。最澄の教えの一つになっていますが、彼を敬愛した天皇もその意味を味わい「千里」といふ言葉を、一種の座右の銘としていたのではないかと推測です。

さらに、吹田市山田・円照寺の存在があります。寺伝によると、仁寿三年（853年）に最澄の孫弟子にあたる円仁上人（のちの慈覚大師）が創建したという千里最古の

寺です。「千里」を含んだ言葉に「千里同風」というものがあります。広辞苑によると、「遠隔の地にも同じ風が吹く」、「天下よく治まつている太平の世のこと」。唐の國と文化を好み、唐の國を思わせるようなならかな山が連なる広大な丘陵。この丘陵を頻りに訪れた嵯峨天皇が、遠く離れた唐の國に思いを馳せながら、最澄の教えの中から得た「千里」という言葉のイメージをこの地に重ね合わせ、呼んでいたのではないかと。そして最澄の孫弟子・円仁上人が建てた円照寺の後の世の後継者が、最澄と嵯峨天皇、さらに円仁上人のゆかりから、この一帯を「千里山」と名付け、人々の間で定着していったのではないかと、というのが池田さんの推論です。

参考文献

1986年(昭41)吹田市発行「市民の手引き」、1982年(昭57)千里二十年まつり実行委員会発行「千里の歴史と伝統」

しかしどうしてこの地が千里なのか。私は子供の頃から疑問に思っていた。大体地名の最初に数字がつくのは珍しい。万里長城、これは文字通り万里を越すほど長いので、当り前である。次に魏志倭人伝に記されている一支国(壹岐)の「一」はあまり意味が判らないそうである。大阪市内に「千日前」という駅名がある。これはこの地にあつた二つの寺(法華寺と竹林寺)が千日回向をしていた名残である。回向とは自分が積んできた良い行いを、他の人に回してあげることを念じてお参りするこ

とだ。随分お節介な行事である。決められた千日回向の日にお参りすれば、一回のお参りで千日分の功德があるという欲張りな行事で、そこで千日ごとの回向を行って法華寺と竹林寺を千日寺と呼んだ。この寺の前だから「千日前」だそうである。現在道頓堀と並ぶ大阪ミナミの繁華街で、吉本興業の本拠地「なんばグランド花月」があり、大阪のお笑い文化の発信地である(以上千日前の説明は、谷川彰秀『大阪地理・地名・地図の謎』実業之日本社2013.9に拠る)。千日前の千は千里山とは関係なさそうである。

また『阪急沿線 謎解き散歩』(私鉄沿線散歩の会著2013・8)の「千里山駅」の項目によると、次のように記されている。

千里山(千里丘陵)とは、豊中市から吹田市、茨木市、箕面市にまたがる約八キロメートル四方の広大な丘陵地の名称である。なだらかに起伏する連丘の姿は寝山とも呼ばれている。数キロメートルに及ぶ起伏の間に九十九もの谷があつたので九十九谷とも呼ばれ、その広大さから「せんにやま」とも呼ばれるようになった。その千里山に広がる千里山住宅地は、大阪府嶋下郡吹田村、現在の大吹田にある千里山西地区に計画的に建設された。大阪郊外の田園都市である。

東京にも似たような田園都市がある。田園調布である。東横線の駅を出てすぐ噴水つきの小公園があり、それを

軸として各道路が放射線状に広がっている。多摩川沿岸に作られた田園調布は、今や庶民の憧れの的で、多くの著名人が住んでいる。外国人も多く、いわゆる回覧板は英語で、年二回(お盆と年末、ゴミの収集の通知)郵便で各戸に配達される。千里山と田園調布とどちらが早く開発されたのかは知らないが、千里山の方が早いと思う。終戦直後の田園調布は当時の千里山より、ずっと遅れている感じだった。しかし一軒の広さは千里山よりずっと大きかった。

田園調布は、1918年(大正7年)に実業家渋沢栄一らによって、立ち上げられた『理想的な住宅地「田園都市」の開発』を目的とする田園都市株式会社により開発、1923年(大正12年)8月から分譲された地域である。開発の主旨や開発着工時期も似た千里山住宅地は同じ1923年から入居が始まり僅かながら先行している。

前述の千里山の説明では「千里」の意味を広くで解釈している。しかし「千」とはもともと長さを表し、漢和辞典によると「遠い」という意味もある。遠くまで走る馬を「千里の馬」という。ではどこを起点として遠いと云っているのだろうか。「千里」の意味については前述の「千里山70年のあゆみ 千里山地名の由来 その一」に詳しい、「広大な世界、国、社会を意味する」とある。

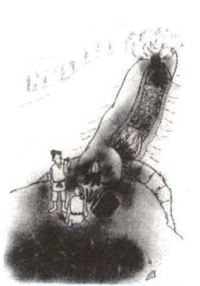
私は古代に千里山を開発したのは秦氏ではないかと考えている。秦氏の本拠地は山背(京都南部)であるから、京都から見て遠かったのではなからうか。

桜井谷窯跡群23号窯跡

千里山(丘陵)の西斜面(一)から出土した須恵器の窯跡です。2号窯跡から出土した須恵器の窯跡。半壊した窯跡である窯跡の全長は約13m、幅は2.5m、深さは約1.5mの大きさです。2号窯跡の形状は、中世で最も典型的な窯跡である「ア」型が判明しています。また、窯跡の中心には須恵器の土が埋め込まれており、これは須恵器の土が窯跡の中心に埋め込まれたことを示しています。また、窯跡の中心には須恵器の土が埋め込まれており、これは須恵器の土が窯跡の中心に埋め込まれたことを示しています。



桜井谷窯跡群



須恵器の窯跡

豊中市と吹田市を中心に広がる千里丘陵には、古墳時代中期から奈良時代(約1600〜1300年前)にかけて営まれた須恵器の窯跡が数多く確認されています。このうち、豊中市北部の千里川上流域を中心とした窯跡のまとまりを桜井谷窯跡群と呼んでいます。現在までに40基ほどの窯跡が確認されていますが、住宅開発に伴って多くが消滅し、現存しているのは10基程となりました。これまでの調査から、桜井谷窯跡群は古墳時代後期(6世紀頃)に最盛期を迎え、吹田市の千里窯跡群と合わせた生産規模は、大阪府下では南部の泉北丘陵一帯(堺市と和泉市の一帯)に分布する日本最大規模の窯跡群である陶器窯跡群に次ぐものであったと考えられています。

桜井谷窯跡群24号窯跡

千里川左岸の河原段丘斜面につくられた須恵器の窯跡です。調査の結果、同じ場所の2号窯跡が確認され、当初の窯跡が崩壊した後に、新たに作り直していったことがわかりました。新しい窯跡は半地下式構造で、全長は約9.5m、最大幅約2.5mの規模をもち、窯跡下方には灰層が幅1.4mとわかって確認されています。灰層で出土した須恵器の土を分析した結果、6世紀末から7世紀前半にかけて生産されたと考えられます。現在、窯跡は緑地帯として保存され、市指定文化財となっています。

桜井谷窯跡群19号窯跡

24号窯跡から西に約120m、千里川左岸の河原段丘斜面につくられた須恵器の窯跡です。2号窯跡を除いた全長は約9.5m、幅は1.5〜1.8m程度であることが判明しています。灰層は最大で幅7.5m、厚さは約1.5mとわかって約70cmに達します。この窯跡は出土した須恵器から、6世紀末から7世紀前半にかけて生産されたと考えられます。現在、窯跡付近は24号窯跡と同じ、緑地帯として保存され、市指定文化財となっています。

三河川流域

「医療」の調査から、三河川流域の須恵器の窯跡群は、6世紀頃から7世紀前半にかけて生産されたと考えられます。この窯跡群は、豊中市と吹田市を中心に広がる千里丘陵に分布する日本最大規模の窯跡群である陶器窯跡群に次ぐものであったと考えられています。



猪名川流域の古墳と郷 (高橋照彦「猪名川流域の古代氏族と勝福寺古墳」より)

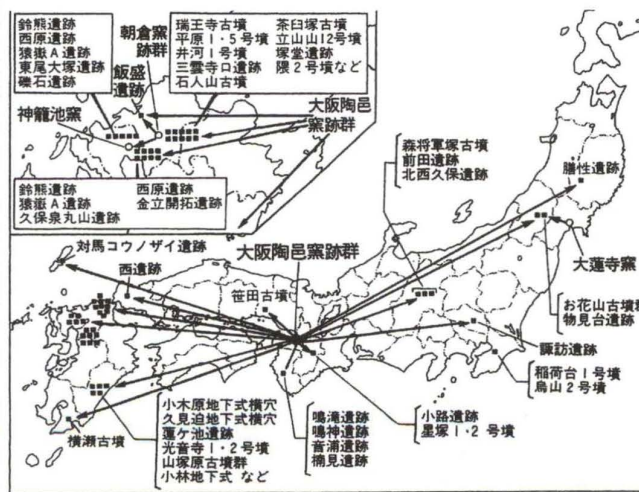
と続いている台地で、川も多く、重い須恵器を運ぶのにもってこの土地であった。古墳時代から奈良時代にかけては交通手段は主として船である。古代の千里山周辺、摂津国には入り組んだ無数の川がある。江戸時代の千里丘陵の地図には十三本の川が記されている(箕面川、天神川、天王寺川、千里川など)。一番大きいのは猪名川である。千里川は遠く箕面の国分を源流とし蛇行しながら豊中市あたりで猪名川に合流し、猪名川は神崎川に吸収され、更に淀川に流入する。(図3) 淀川から大阪湾に出て遠くへ運ばれた。地図を辿るとその長さに驚かされる。

図3 古代における摂津国の河川

それには「千里川右岸の段丘斜面に作られた須恵器の窯」「郡中でも最大クラスの窯跡であった。」「豊中市と吹田市に広がる千里丘陵には、古墳時代中期から奈良時代(約1600〜1200年前)にかけて作られた須恵器の窯跡が数多く確認されています。このうち、豊中市北部の千里川上流域を中心とした、窯跡のまとまりを桜井台窯跡群と呼んでいます。現在まで、6基ほど確認されていますが、住宅開発に伴って多くが消滅し、現存しているのは10基ほどになってしまいました。(中略) 日本最大規模の窯跡である陶色窯跡群があったと考えられています。」とある。須恵器とは素焼の土器のことである。広辞苑には「須恵器」の項目に以下のようにある。古墳時代から奈良時代にかけて大陸系技術による素焼の土器。良質粘土で素焼をし、登り窯を用い、高温の還元炎でやぐため、薄墨色を呈するのが一般。主として食器祭器として用いる。祝部土器。とある。素焼に上ぐすりを塗って焼けば陶器である。また図2にあるように大阪陶器窯跡群といわれる土器の一大生産地は大阪であり、大阪から遠く陸奥の国から対馬、薩摩まで運ばれていた。大阪では須恵器は千里丘陵の他に南の河内でも生産されていた。現在寝屋川市には「秦」の地名が多く残っている。『古代国家はいつ成立したか』(都出比呂志岩波新書 2011.8)によると、須恵器の生産は同時に鉄器も作っていた。その近く

に馬場(牧)があった。即ち軍事的工業生産地であったのだ。千里丘陵もそうであったと推察される。

図2 大阪から全国各地への土器陶器の流通



千里丘陵は地質の柔らかな丘陵で、登り窯を作るのに適していたのであろう。しかもこの地は豊中丘陵、池田丘陵、五月山丘陵、待兼山丘陵、長尾山丘陵、伊丹丘陵

須恵器と並行して作られていたのに土師器がある。土師は「大和朝廷で葬式、陵墓、食器などを作る集団」(広辞苑)という。同じ土器でも須恵器は庶民の必需品である。大きいのは水がめ、酒がめ、かめ棺、塩入れなどをつくった。色も地味で、薄墨色であり、土師器の方は明るい朱色に近い。

土師氏の興りは埴輪制作と関係がある。11代垂仁天皇は、殉死の風習を止めることを望まれ、力士の興りといわれる野見宿禰の提案で、出雲の土師を招いて埴輪を作らせ、陵墓の周りに並べることを始められた。「はじ」とは良質の粘土のことであるが、この埴輪制作の集団を「土師」氏と称す。土師氏は平安初期に一時「大枝」と改姓し、のち「大江」となった。その中心人物は在原業平の長兄大江音人である。在原氏兄弟は51代平城天皇の孫であるため大江氏は代々学者を輩出した(大江匡房など)。又作る土器も庶民用の須恵器ではなく、宮廷用土器であった。

少し寄り道 千二小には土師(はぜ)義雄先生(昭和8年3月〜昭和28年3月)がおられました。小生(24回生)達を担任され昭和28年3月無事卒業させた後他校へ転任されました。珍しい姓について、先祖は土師器を焼いていたとよく伺いました。(編集部奥田)

この須恵器を作るために千里丘陵を開発したのは秦氏であると私は考えている。日常の庶民生活で水を飲むに

日本が援軍を出したにもかかわらず、新羅と唐の連合軍に敗れ、滅亡する（白村江の戦い。六六三年）。天智天皇は唐が日本に攻めてくるのに備えて、大宰府を設置し各地に朝鮮式山城やのろし台を作った。こうしてさまざまな渡来人が来日したが、社会の底辺で力を発揮したのが秦氏である。『謎の渡来人 秦氏』（水谷千秋 文春新書 2009.12）には秦氏に関する記述を以下のように紹介している。

①『姓氏家系大辞典』太田 亮 戦前著

天下の大姓にして、その氏人の多き事、ほとんど他に比なく、その分支の氏族もまた少なからず。而して上代より今に至るまで、各時代とも、恒に相当の勢力を有する事も、他に類例なかるべし。

② 平野邦夫

非貴族的、非官僚的体質を持った、著しく底辺の広大な在地的土豪氏族。

③その他山尾幸久氏はじめ多くの学者が秦氏を評しているが、一様に秦氏は社会の表に出て名をなすのではなく、社会の底辺で実利をとり、「富み榮えた」。

（関 裕二『ヤマト王権と十大豪族の正体』PHP 文庫（2013.8））

更にこの著では秦氏について以下のように述べている。秦氏は養蚕が得意で、庸（麻布）と調（絹・絶）と上質の絹を奉獻し朝廷に積み上げた。

また先進の土木技術を日本にもたらしたことで名高い。渡月橋のある嵐山一帯は秦氏の治水事業の手が

が同源である。秦氏が養蚕、はた織りに長けていたことからハタ氏と言われるようになったという説もある。

②百済から来た説。日本書紀応神天皇十四年に

「是歳弓月君百济より来帰り」とある。一方先述の如く古事記応神天皇段には「新羅人參渡り来つ」とあり続いて武内宿祢が率いて「百済池」を作りきとある。日本書紀応神紀7年には「高麗人、百済人、任那人、新羅人が来て韓人池を作った」とある。その池は百済池とも韓人池とも呼ばれていたのであろう。即ち百済人が最も多かったと思われる。『新撰姓氏録』には応神天皇十四年に弓月君が百二十七県の百姓を率いて帰化したとあるが、新羅か百済かを明らかにしていない。

（以上水谷千秋『謎の渡来人秦氏』を参考にした。）

渡来人秦氏が一番最初に定住したのは奈良県南部の葛城氏の本居地であり、後で山背（京都南部）に移った。日本書紀に最初に秦氏の名が現れるのは雄略天皇十五年秦酒公である。それによると秦氏が最初に朝廷に献上したのは酒であった。この酒を天皇は大変愛された。また秦氏は庸・調の絹・上質の織物を奉獻し、朝廷に沢山積み上げた。そこで禹豆麻佐という姓を下さった。日本書紀に「禹豆麻佐とは皆盈積める貌なり」と説明している。現在でも「うず高く積み」という表現がある。そこから「太秦」の名称が興ったのである。即ち「うづまさ」とは多く積むを表現する語であったのに姓になり「太秦」という字が当てられたのである。秦氏が最初に作った神

入っている。それが葛野大堰で、川の中に人工の島を作り、水をわけ、灌漑用水を確保したのだ。この土木技術は、秦の都江堰と同じだと指摘されている。

ところで「秦氏」と呼ばれる人たちは、血縁で結ばれていitわけではなく、便宜上ひとくくりになされた集団であり、擬似的な氏族であった。だから「職業集団」と考えた方がわかりやすい。朝鮮南部からやってきた殖産の民をまとめて秦氏と名のらせたわけだ。その人数たるや、膨大な数にのぼったようだ。

とある。また秦氏は秦の始皇帝の子孫だと名のっている。これは血統的に子孫なのではなく、秦の国にいた民族という意味である。が一応系図を作っている。（秦氏は秦から新羅又は百済へ来てのち来日したらしい）

秦の始皇帝——〇——〇——孝武王——
攻満王——融通王（一名弓月王）

《秦（しん）国の亡命者が日本で「ハタ」と呼ばれているのはなぜか》

秦の遺民たちが日本で秦・太秦と称するようになった根拠にはまだ定説はないが、幾つかの説を挙げる。

①秦王朝の圧政から逃れて朝鮮半島を南下し、新羅の伽耶から来た説。根拠は現在の慶尚北道蔚珍郡海曲県の古名が「波旦」であること。1988年発見の新羅の古碑に「波旦」の地名がある。「波旦」の意味はバタ（海）又は（巨、多、衆）など。

又、はたおりに因む。機織りのハタは日本語と朝鮮語

社大酒神社（大辟神）は京都市左京区に現存。酒を米を材料として作ったのである。京都市西京区にある「日本第一醸造の神松尾大社」は秦氏が祀っていた。聖徳太子は秦氏を支援していたが、太子が山背へ行かれる時、宇治橋で秦氏がお迎えしたが、一族正装して全員馬に乗っていたそうである。太子は「そのうち山背が都になるだろう」と言われた。秦氏は殖産、工業に秀でていただけではなく、当時は少なかった馬を飼育して武力を伴っていたのである。因みに太子の長子は山背大兄王という。秦氏と同時期に日本に渡来した一族に漢の高祖の子孫を名のる漢氏がある。彼らも日本では「阿夜」と言われながら漢の字を捨てなかった。秦氏も漢氏も過去の大国漢、秦を誇りとしていたのであろうか。

更に秦氏は一時期「王国」を名のっていた。隋（589-617）の歴史「隋書」に倭国伝があり、その中に「秦王国」と題して以下のように述べている。その冒頭は魏志倭人伝に似ている。

都斯麻国を経る。遙かに大海の中に在り。又、東、一支国に至る。又竹斯国に至る。又、東、秦王国に至る。その人華夏と同じ。以て夷州とするも、疑い明らかにする能わず。又十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東、皆倭に附庸す。

（都斯麻Ⅱ対馬 一支国Ⅱ壱岐 竹斯Ⅱ筑紫）

この「秦の王国」は、豊前、豊後と考えられている。ここでは古代から現在に至るまで、銅、石灰を産し、香

春丘を中心に工業が盛んである。秦氏は、現在にまで通ずるあらゆる産業を興し、日本の発展に寄与した。その範囲は東北（群馬、茨城）、関東平野、東海、信越、近畿、四国、九州北部に及び、古代のヤマト王権の及ぶところすべてに拡がっている。土木工事は交通だけでなく、灌漑の普及にまで及び、稲作を拡め全国の稲荷神社は秦氏を祀っている。大阪市はもともと湿地帯で無数の川が流れていて、数少ない台地であった上町台地を埋立てて市街を形成した。それでも川は産業、交通には必要で、従って橋も多く作られた。大阪の数多い橋の中に高麗橋というのがある。帰化人、渡来人の力で作られたのである。それらの橋は小さい港でもあり、その名残が地名に残っている。横堀川、船場、道頓堀など。

その他、秦氏が貢献したのは高地性住宅の形成開発である。高地性住宅とは川の氾濫を避けて、川に沿った標高20m程度の丘に作られた住宅のことである。川は人間に恵みを与えるが、一方、洪水による災害をもたらした。世界四大文明も大河のほとりに生まれ、大河による恵みとともに洪水に苦しめられた。この高地性住宅の典型が千里丘陵である。古墳時代から六世紀前半までの須恵器の一大産地であった千里丘陵は、時代が変わってより高度の生産手段が流入してきて、産地は現在の池田市に移っていく。新しく入ってきた集団を「今来」と言った。池田市には現在も畑という地名がある。今来の秦氏は千里丘陵から他の産地池田丘陵へと移っていった。千里丘陵の川が小さく、次第に増える物資の輸送に向いて

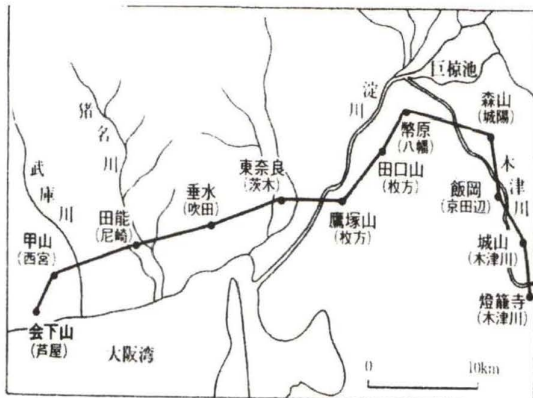
いなかったからと思われる。秦氏の池田丘陵への移転について水谷千秋氏は次のように述べている。池田市全域は、かつては秦上郡と秦下郡と呼ばれていた。池田市は大阪の北郊、北摂と呼ばれる地域に当たる。南北に猪名川が流れ、古代にはその西側の流域を摂津国河辺郡、東側の流域を豊島郡と呼んだ。秦上郡と秦下郡はこの豊島郡に属する。（秦上郡と秦下郡の所在地については前掲 図3をご参照下さい）。

この秦氏の移住について、同書は池田の方が猪名川に近く、背後に能勢の山林をもっている、船材や燃料の木材を入手しやすかったからであろうといっている。「この新旧交代は豊島郡に限ったことではなかった。猪名川流域全体にわたる勢力交代でもあった（後略）」。

こうして「桜塚古墳群は急速に下火に向か」った。しかし秦氏は移住するについて、前勢力と戦ったり、彼らを排除するのではなく、なるべく先住者のいない地を選び、彼らの祀る神を温存し、人的交流を深めた。そこが他の氏族と違うところである。

速一五〇キロを超過する速さであった。日本でも一九八〇年ごろNHKで会下山（芦屋市）から燈籠寺（京都府木津川市）までノロシをあげる実験をした。時速30キロの意思伝達が可能で驚いたという。ノロシをあげる場所は平地でも高すぎる山でもない丘陵地が選ばれた。千里丘陵は最も適した場所であった。図5参照。幸い唐はその後高句麗を攻め、日本に來なかつた。しかし当時の朝廷が、いかに唐の來襲におびえていたか、想像される。

図5 淀川水系の高地性集落とノロシ実験コース



《慣用句「千里」と嵯峨天皇の漢詩》

漢詩和歌には慣用句が多いが「千里」もその一つである。慣用句の場合、訓みは「せんり」である。前掲の「千里の地名の謂われについて」にもあるように「千里」の初出は司馬遷の『史記』にある「照千里 守一隅（千里を照らし一隅を守る）」で、これを「照千一隅」と言い習わしている。嵯峨天皇も「愁うなかれ千里苦心多きを」とうたっている。また千里山の地名のもととなったといわれる嵯峨天皇の漢詩は以下のものである。

『文華秀麗集』巻下 雜詠江上船
一道長江通千里 漫漫流水漾行船
風帆遠沒虛無裡 疑是仙查欲上天
（淀川を揚子江にたとえ、まんまんたる淀川を帆に風をはらんだ船で行くと、遠く広く千里も見渡せる）

という雄大な景色を詠んだもので、明るく広々とした千里丘陵の風景が目にかぶ。嵯峨天皇は「この君、ことのほか放逸にして、まつりごとを御心にいれたまはず」（鎌倉時代源頼朝著『続古事談』）と評されるが、動乱の平安初期に儒学漢詩を奨励し、その後の日本文化（いざという時詩文を詠む）の伝統を作った、一大文化人であった。